台湾（高雄）の国民小學の教育から、台湾の体育を知る

前高雄日本人学校　教頭
新潟県柏崎市立二田小学校　教頭　西　村　幸　世

キーワード：高雄日本人学校（台湾）、小学校体育科教育、運動会

1．はじめに

2013（平成24年）高雄日本人学校に派遣された。2014（H26年）9月に、校舎の老朽化等の問題から、高雄の現地校である国民小學の一棟を借用し、学校が移転した。そこで、現地校の体育授業や運動会を観察し、日本の体育授業と比較することができた。台湾の教育を通じて、改めて日本の教育について考えることができたので、その一部を紹介したい。

運動会　銅鑼の合図でスタート

2　台湾の教育概略

(1) 教育制度

台湾では、2000年3月に「国民中小学九年一貫課程網要」（日本の学習指導要領に相当）を公布し段階的に実施している。台湾は6・3・3制の義務教育であり、授業日数は年間200日で、上学期（8月～1月）と下学期（2月～7月）の2学期制で、小学は40分、中学は45分授業である。低学年は、週4回は4時間で、週に1回午後も授業がある。中学年は週2日、高学年は週4日、7時間授業。毎週水曜日は教師の会議や研修のために、全校4時間である。

(2) 教育事情

・名門高校に多く進学する公立中学校の学区にある小学校は、人気がある。越境入学をしてくる子どもが多いと、定員オーバーとなり、新しく引っ越してきた子どもは、隣の学校へ通わなければならなくなる。
・国の重点は「科学技術の発展と国際人の育成」。そのため、知識詰め込み型の授業が多い。
・自国の文化や伝統を大切にするため、客家語、原住民の言葉の授業がある。しかし、漢字の国でありながら、書写の時間はカットされた。
・学校の昼食は、給食か弁当を選べる学校もある。昼食後には40分間の昼寝の時間がある。
この時、寝ないで遊んだりおしゃべりしたりすることは禁じられている。
・親の教育に対する関心が高いことや、共働きの家庭が多いことから、放課後も、安親班や補習班で、学校に残って宿題をするか、近くの塾へ行くなど、塾や習い事が盛んである。
・学校では、スポーツ少年団や部活動のようなスポーツや芸術活動が盛んに行われている。
台湾で人気のあるスポーツとしては、プロリーグが存在する野球、準プロリーグが存在するバスケットボールが挙げられる。

3　國民小學（高雄）の体育科教育

(1) 授業から

①現地の國民小學では、野球・ダンス・新体操の体育班の子どもたちは特別カリキュラムで授業を行っている。一般の体育授業も一応は年間指導計画に沿って指導されているが、「健康と体育」の授業時間の配分と担当教師が曖昧であったり、教師の中には体育に関する知識がなかったりする。日本人学校の体育授業と大きな

差はないが、教師の指導力と子どもたちの体育に対する意欲に、日本との違いを感じた。

②高雄市内の學校は児童生徒数が多く、高雄日本人学校が借りている國民小學は児童数1600人で、体育館はなくグラウンドの決められた場所で、いくつかの学年・組が、それぞれに体育授業を行っている。学校の規模と児童数の割には、全校児童が十分に運動するスペースがない。また、体育科の年間指導計画及び教科書には、指導内容が明確に示されていて、体育科教育が充実しているように思われるが、体育の時数が限られている中で、指導計画にあるような豊富な指導内容が確実に実施されているかは疑問である。

③授業の開始と終了が明確ではなく、子どもたちがいつの間にか集まって始まっているという感じである。教師の説明の時間が長く、子どもたちの運動量が少ない。また、安全面の配慮が不足しているように感じられた。

(2) 國民小學の体育科教師の話

①体育専科の教師が数人いる。子どもたちには、運動嫌いの子も多く、バスケットなどの好きな種目には興味を示すが、マラソン練習などは嫌がる子が多い。特に女子は体育嫌いの子が多い。体育は、入学試験には関係がないという考え方で、興味のない子は熱心ではない。全体の体力は平均並みだが、体育班の選手級の子どもたちや体育班の野球部の子どもの体力は高い。

②学校の目標は、体育の技術的な能力の向上と子どもたちに運動の習慣を身に付けさせることである。台湾はアジアの中でも、自主的に運動するという運動習慣が低いので、国としても運動を働きかけている。学校では子どもたちに運動の習慣を身に付けるように配慮している。

③以前は体育の授業は重要視されていなかったが、教育革命後は国も体力が大切であることを認め、体力も進学の基準となり設定されたので、正常な体育授業が行われるようになった。しかし、教師の指導によって差があり、小学校ではまだ昔と変わらない体育を行っている。

(3) その他

①児童の体力について、年１回全国で実施する体力テストがある。心拍数・柔軟度・瞬発力・腹筋力などを計測し、結果は教育部に報告し、ネット上で公開（體育年報）している。

②台湾の体育科教育についての資料は、インターネット上で見られるようになっている。教育部體育署からも運動・スポーツに関する資料や、国全体の目標等も提示されている。国としての取り組み姿勢は素晴らしいものである。これをもとに、指導する教師がどれくらいの意識や狙いをもって、指導に当たっているかが重要である。

4．高雄の國民小學の運動会

(1) 実施日 2014（H26）年 12 月 6 日（土）前日の午前中に全校で予行練習があった。

開会式　招待校のパフォーマンス

高雄市　國民小学校　運動會節目表より
（運動会プログラムからの抜粋）

・校慶序舞　招待校のダンスパフォーマンス
・開会式
・5、6 年生　100m 走
・5、6 年生　200m 走
・バザー、売店　開始
・3 年生興味レース
・1 年生 50m 走
・各学年徒競走と興味レース
　―　交互に実施　―

・幼稚園、保護者　興味レース
・1、2年生　終了　放課
・3~6年生　昼食
・4~6年生　リレー予選
・4~6年生　リレー決勝
・閉幕

(2) 当日の様子

・当日の開会式前のイベントには、招待校のパフォーマンスもあった。

・開会式は、校旗掲揚から国歌斉唱、そして来賓の紹介・校長挨拶・来賓の挨拶と続いた。来賓紹介が長く、校長先生の挨拶の間でも来賓が来るとそのたびに紹介していた。

　グラウンドに座っている子どもたちは、来賓の話を聞かずに騒がしかった。来賓は、開会式終了後には全員が帰ってしまった。

・運動会の種目は、徒競走と興味レースのようなものである。一部の学年では事前に練習をしていたが、それほど練習しなくてもできる内容である。

(3) 徒競走

・1～4年の競走には、各レースの1位から3位までにメダルが渡される。トラックの2か所を使って、銅鑼の合図でスタートする。ゴールには1位から3位までのメダルを持った職員がいる。ゴール後にメダルを持った職員が、子どもを追いかけてメダルを首にかける。メダルをもらった子どもは、嬉しそうであった。5・6年生の徒競走は順位を決めることはなかったが、それでも子どもたちは一生懸命に走っていた。

・ゴール付近には大勢の保護者や子どもがいて、ゴール後すぐに止まらなくてはいけない。児童数が多いので、次から次へとスタートさせなくてはいけないが、たいした混乱もなく進行していた。

(4) 興味レース

・1年生は親子で皿に載せたボールを運ぶレース、2年生は子どもがペアで折り返すリレーであった。子どもたちは一生懸命走っていた。興味レースに参加している保護者も、レースを見ている保護者も日本と同じようにカメラを構えて、熱心に写真を撮っていた。

　日本と同じような種目で盛り上がり、祖父母や兄弟などの応援風景が見られた。

(5) 運動会を観察して

・運動会は学校の重要な行事であり、自校の教育活動のPRの一つのようである。近隣の小・中学校の校長、退職校長、市議会議員、PTA会長等の来賓が多く、挨拶や紹介の時間が多かった。開会式の進行係は、来賓挨拶の順番を決めることや、紹介に漏れ落ちがないかの確認で大変そうであった。

・子どもたちは出場まで教室で待ち、時間になると教師の引率でグラウンドに来る。競技が終了すると、次の競技まで自由に過ごし、教室に戻る。学年でまとまって、他の子を応援することはない。

・出店が出たり、家族総出で見学に来たりとお祭り気分である。児童数が多いため、種目は限られるので、全体の運営はこれで仕方のないことだとは思う。

・この学校では、運動会は各特別班の発表の場でもあるので、開会式イベントは盛り上がる。その他の学年では、運動会のための練習にそれほど時間をかけなくても、当日実施できる内容である。高雄日本人学校は運動会のための練習ではなく、運動会を目指した目標をしっかりと持たせ、運動会で子供たちが成長するような練習をさせていたが、運動会のとらえ方が日本とは違うようである。

・運動会の進行は、3～4人の体育専科の教師が、形式にこだわらずに、淡々と行っていた。他の教師は自学級の児童の出場する種目のときだけ、グラウンドに出ていた。

・スタートのピストルは400M走のみ、職員が一人で行っていた。それ以外は、スタート合図は銅鑼を鳴らす職員が一人と、ゴールでメダルを渡す職員が3人だけだった。

・子どもたちが混乱なく競技を実施できるのは、事前の練習が適正に十分行われていたせいなのか、何かあっても気にせずに行っていたからなのかは不明である。

5．まとめ

(1) 天然資源の乏しい台湾では、教育によって人的資源を拡充する必要性が強く意識されており、そのために教育制度も確立している。台湾は学歴社会であり、小学校でもその影響を受けて、塾や習いごとへ行く子が多い。

(2) 小学校体育では、指導計画が明確になっていて教科書もある。指導計画や教科書は、詳細に記載されている。しかし、内容が豊富なので指導時数が不足するように思える。

(3) 台湾の教育は、日本の教育と大差がないように見える。運動に対する興味は二極化しているが、運動に興味のある子は、小学校から体育班で専門の教育を受けることができる。

台湾の総人口約2300万人（2013年4月現在）。日本の九州よりも狭い国土に、日本人とほとんど変わらない生活様式をもつ人々が住んでいる。日本の統治時代を懐かしみ、親日派の人々が多いのは、日本人が残した功績もあるが、日本の教育の影響も少なからずあると考える。派遣の間に、多くの台湾の人と親しくすることができ、台湾の体育科教育についても知ることができた。高雄日本人学校に派遣していただいた貴重な経験と、今回調査したことを、今後の自分の指導に活かしていきたい。